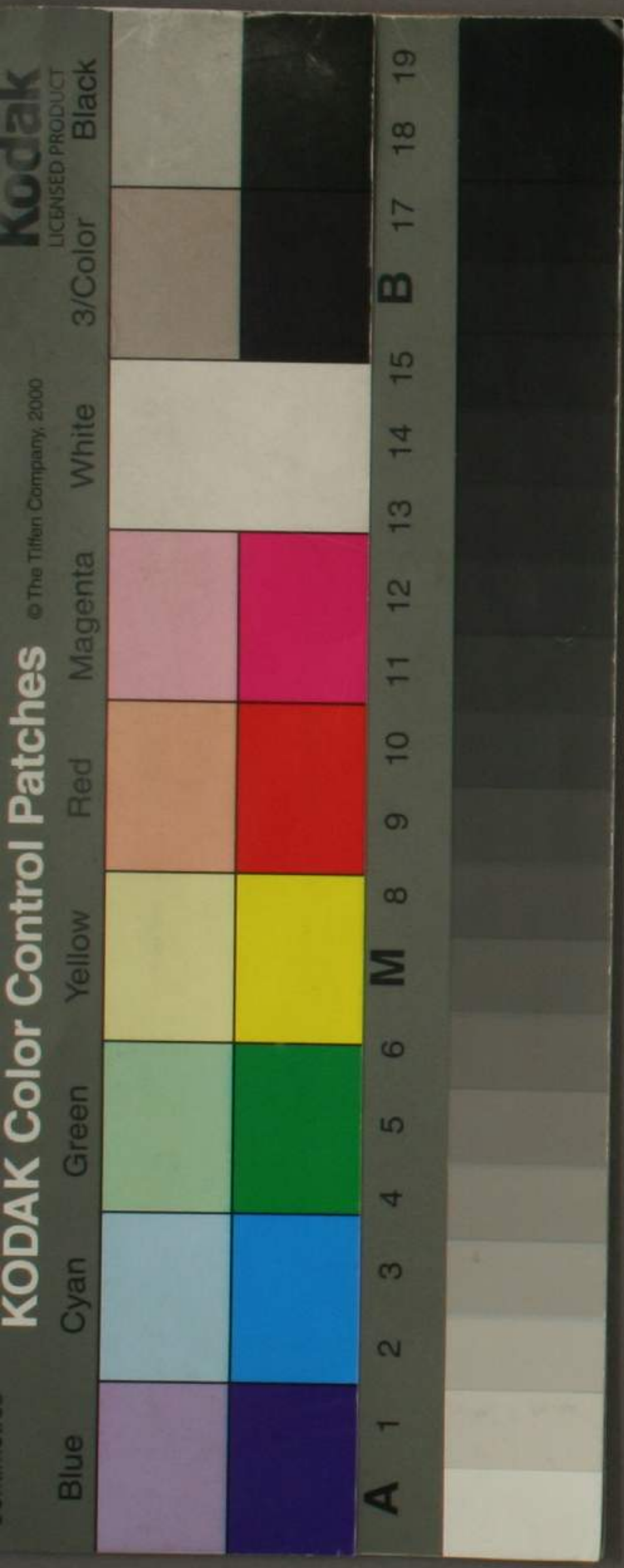


ヨ 雙 25  
2219  
巻 5-5

日本山海名産圖會卷之五

○ 目 録

○ 備前水母

○ 近江石灰 并美濃

○ 伊萬里陶器

○ 越後織布

○ 松前腩 昆布

胡狹笳

○ 唐船入津 菩薩揚

○ 阿蘭陀船

一名  
借眼公  
海舌

漁人これと採事るゝ

○形ハ蓮の葉と覆ひたるが如く其邊は足あしの如き物なり色々  
紅紫こうしとて眼めもほもとや腋わきの下は糸いとのごとく紫むらさきれど長曳ながひく物なり  
魚うい蛸しほかろふは是これは随附ずいふを俗ぞうふこれに眼めと借かりて游とまぐともいつり  
故ゆゑは借眼しやくがん公こうの名なり○ちろろのち盤たらいのごとく小せうなる物ハ盆ぶんのごとく



水<sup>みづ</sup>備<sup>ひ</sup>  
母<sup>はは</sup>前<sup>せん</sup>



其味淡く薑醋とよみねして食と大抵泥海の産として筑前備  
前等より多く江東より鮮し〇是と採るより九月十月の江海上より  
浮漂ひて流ると舟より攪網と以て採る波荒き時に破へりちあ  
ぐふもけりなり

夫木抄源仲正

我々ハ海の月とぞ待とるけの骨より入世なりやと

### 〇石灰

一名 漆灰 散灰 聖石

今近江の物上品と云美濃又是より等し是金気なき地なれども  
えい和加芳野高原より焼初て其年月未詳といふも本朝用い  
ふこと甚古し桓武天皇大内裏御造燃清涼殿御座の傍より石  
灰櫃と塗作らせたまひて天子親四方拜るなどの土席とに其外用  
より益とるものも多し先億萬の舟楫億萬の垣牆凡水と載るの  
物溝洫器物に至るまで是より成らんと實天下の至寶なり

諺に都なると知百里の内外土中かならむとこの石を生むと云

〇今江加伊吹山近邊又石部より焼物皆青石なり山加鞍馬より焼

物の夜色石とて青石より分るる青白なるは是より石ハ必土内より

掩ふる二三より掘取りけりて風霧と見り物ハ取らば

伊吹山の麓更地山一面の青石なり島筋より物ハ下品とて掘出し

失よりつゝお破り手摺轉木を以て二百間斗の山と磨落せば凡

砕けて地より付くもの物なりとせやバ川々船より渡せり

礪礪と焼くもの石灰より分れて

燔法ハ 窯の高さ三尺廣さ周経四間計田土より製する下より

風の通ざる穴より先石灰尚お碎きて程より満り其上へ炭を

おさなぐり火を置き火氣満て底より遠るを候いて火を消し

灰と取出して幾度もおろり又美濃より焼く窯の方ハ異なり

櫓窓といひて高二丈周経三尺斗内ハ下程次第より細く三角より



石<sup>り</sup>近<sup>り</sup>  
灰<sup>と</sup>江<sup>と</sup>



焼く灰と自然と底に落らんが為なり石と炭とを夾みて幾く  
重し積重下より焼きて火氣を登せ底よりさへ燔きふと横  
の穴より掻出せりかくては石と炭とを上へ積添て燔初し  
より凡百日本の間晝夜絶る事なり是中華の方の如くを夏  
冬ハ燔となく燔とて二十日許風中よおけば熱火を蒸せて自然  
吹化して粉となり又急用者ハ水とそけい勿忽ち解散とま  
かきども風化の物とよりてはど免る俵を籠めて風の如く  
るをよれき尚貯へ置けば次方目も重く灰も自然に倍しはどめ  
ゆるさ俵も後ハ張切る許とハなれり是とフルこゝりかくて二年  
ほどと越えくかろぐ市中へ送り出せりさてかくなりて  
後ハ水と忘るりゆと洗けい忽ち燃出ていんともさるる  
なり故に舟中ハ是と専と守り又牛ハ負ふせて出るる若雨ハ  
いそいで出て牛と損と悲れ常ハ牛御の腰に鎌をさし強ら

縄とゆいやく切解の用意と

○蠣灰

蠣房のその蠣の条下よりさるる年久しこ物ハ

大に數大崎嶇として山形のどさめものより海邊のハ別は幾金と

植と成持して足を濡して是と採りて燔き用也  
今ササキは集西の杜蛎  
ハ即ち碎けたりなり

大坂などよ用るもの多しハ灰として石灰ハとくなく  
破り灰屋

招牌は本石灰と記しぬる物の近江の物とさせり  
燔方石灰はかきふ  
事なり但し蛤蜊と燔とるに至る下品なり

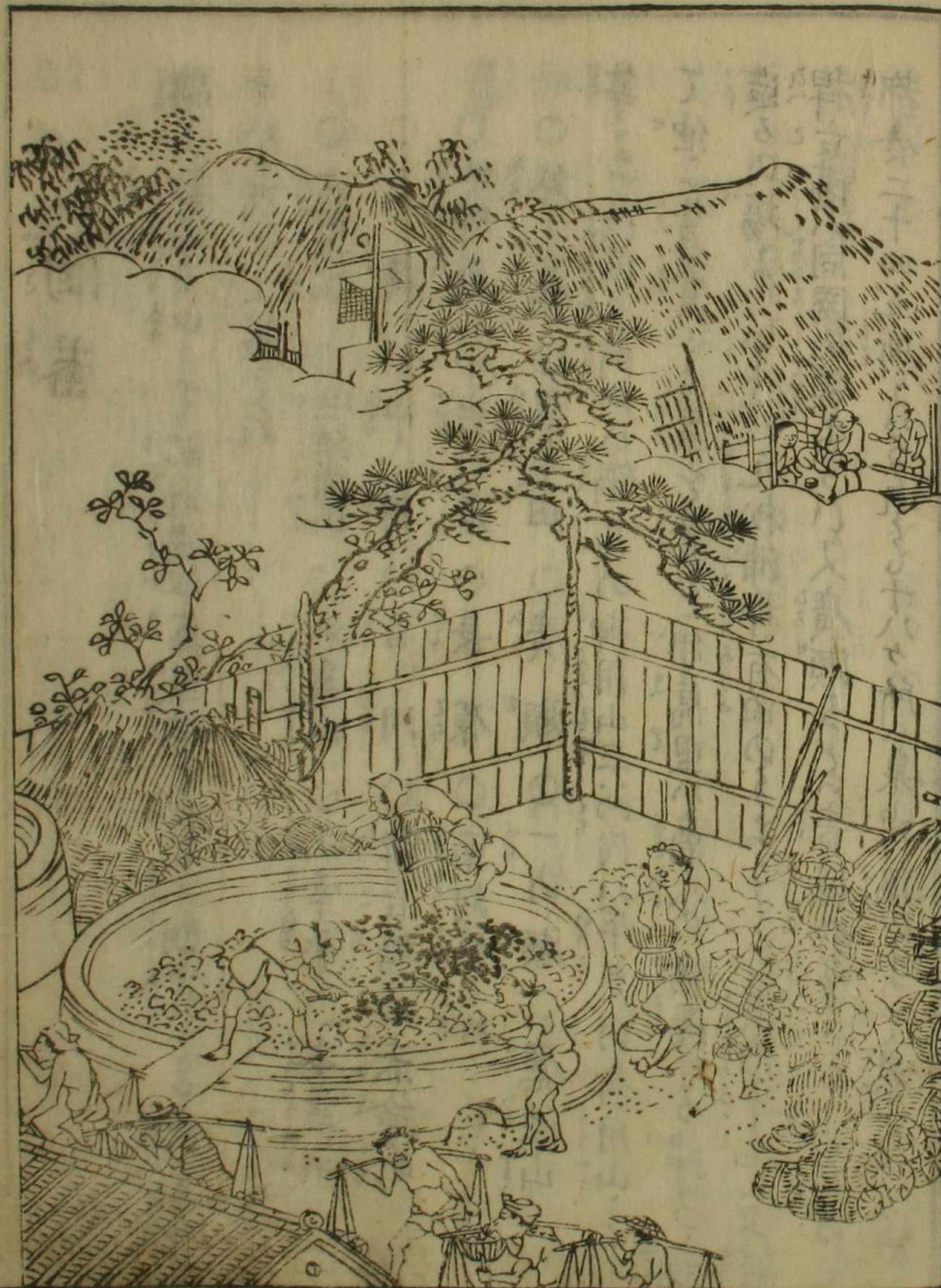
○灰用方

舟の縫合せの目と固くするハ桐の油魚の油は厚さ

絹細き羅と調へ和して杵く事并許して用也  
○又牆石砌るとにハ

先篩ふて石塊を去り水は調へ粘合せ油をかき  
○壁を塗るるハ糸

粘と加ふ  
○水と貯め油とをい灰一分ハ河の黄土二分土塊を篩めて  
あま和し粘合せて造るハ堅固にして水漬壞せどは余澱を造り又  
紙と造るも加え用ち也尚其用枚速ぬるに



○陶器

諸品數品有中も肥前國伊萬里焼と云と本朝才と云と氏窯山凡十八ヶ所と上場と云

○大河内山 ○三河内山 ○和泉山 ○上幸平 ○本幸平

○大樽 ○中樽 ○白川 ○稗古場 ○赤繪町

○中野原 ○岩屋 ○長原 ○南河原二所

○外尾 ○黒牟田 ○廣瀬 ○一の瀬 ○應法山

等ては内大河内ハ鍋島の御用山三河内ハ平戸の御用山等て他ハ貨賣と云事と禁と伊萬里ハ商人の幅濫せり津よて焼造るの場ハ一ヶ所ハ松浦郡有田のうちうて其内申尾三ヶ所稗古場ハ同國の領ちうハ又廣瀬と云青磁物多しして上品はし都合二十四五所あるれも十八ヶ所ハ泉山の協ありて是土の出る山

○埴土

泉山は出て國中の名産本朝他山は比類なく中華

ハ中國の五六處も出せり是土よて土よけ石よて石より

づらば其性甚堅硬一奉盤金と云るも赤かき金杵の流水碓は

是と春くむ 杵の幅一尺半厚さ一尺 最水勢はくちをけて碓の數

多く連られよく未粉となりたり又他の土の柔軟なりと二三品

和合せて家の内の溜池は漂一度く拌通しよく和したるを飯

籾は漉し又外の溜池へ移しよく澄し其上は浮きりものと細料

と一中と普通の上品は用ひ底より下沈たるは取捨て不用とて其

ろ干の土と素焼窯の脊は塗附内の火力を借りて吸乾し最

これよりこれを候いよく搥き落し重て清く調和かの團子

のどく粘和して工人は供ふり是より婦人の手為なり

○造瓷坯器 凡瓷坯を造るは兩種あり一は印器と云方圓數

品瓶 甕 壺 合の類 尾風 燭臺の類も及び是等ハ凡そ埴

肥<sup>ひ</sup>前<sup>まへ</sup>伊<sup>い</sup>萬<sup>ま</sup>利<sup>り</sup>陶<sup>やと</sup>器<sup>の</sup>



同打と園か書画



同焼

同素焼  
同過鏽



成て或ハ面は破り或ハ面は截り又再び白泥と埴て乾く摸く或  
はそのまゝ印を押さへり又おろし土は銹水と和して塗  
合取付たもともなり○一ハ圓器といひて凡ハ小億萬の杯盤ハ  
人間日用乃物して其數と造る事十九なりけ圓器と造るハ  
先陶車と製と其圓盤上下二ツして下の物少く大なり真中ハ  
真木一根を堅く埋む事三尺許高さ二尺許上の車の真中土を  
置て造る下の車ハ工人の足と廻り須臾も廻り止まらず兩手  
を以てかの上の土を上へ押捧げ指自ら内へ交り車の旋轉中  
柵指ハ器の底よりくりて其形の異法心よりくせとく手のうち指  
尖の妙工見はがらち其數と造る其様千萬の數も一輪の内  
出るがごとくにして大小とにやまらば又梳鉢の類の外輪臺と付る  
ハ微く乾いて再び車の上せ小刀とて輪臺の内外を削り成り碎  
缺しけ時は補ひ或ハ鈕手瓶の水にたし別は造り粘土を合せて

和付と又是と陰乾し極白に至らば素焼窯へ入るなり  
○素焼窯ハ圖とて之を梳室の如き物にて器物を内へ積みか  
ね火門一方よりて薪を用ひ度量を候ひ火を消し其す能くさ  
す

○打圈書画再入窯 右素焼のよく冷めらるる取出し一度水は

洗ひ毛綿列衣とて中を磨らる茶梳鉢とての内上下の圈輪乃  
筋と画くハ又車の上せ筆と其所よりてくはまをあらせり然  
して書画と施し其上へ銹漿と二度過てよく乾し本窯へ納めこ  
焼けば火と出て後画自ら顯る取出し又水は洗ふと全備とく土と  
取るよりばりめて終成中てハハ一杯の小皿なりとつても其工力を  
過る七十度して其微細節目尚其數盡とくは  
○素焼の窯ハ家の内より本窯ハ斜阜小園の上は造りて必平地ハ  
ハナリ皆一窯宛一級高く内は廣さ凡三十坪是と六つも連接し



同 本 窯



て悉く其接目は火気の通ざる窓を開く然れども火の患を以て焚く  
内はハ器物とのとる基より即ち土にて制し一つ窓のせて寸隙なく一方を  
細長く明置それへ新と入るは火門ハすゝ高二尺計余うて焚くと凡  
晝夜三四日うて一室は薪凡二萬本と費やをを焚様は手練りうて  
上人下人の雇賃は論じ  
其すくよく冷して取出ると一室の物凡百俵に及ぶ

○過錆ハ即ち土の内より上澄の上品とるうそれハ蚊子の木の皮いと  
焼く灰と調和と最増減加味家々の法りうて一概ならん

○回青ハ 元漢渡の物うてその名未詳是亦よく細末して水に  
和し畫く時ハ其色真皂なれども火を出て後青礬色と変じ

天工開物と見ると是惣く一味の無名異なりは無名異といふハ少  
て炭とくく焼く下は異色の塊生と是と桑木膠と云是も

無名異の名なり又石粉銀山も同名の物なり本条ハ物にいら

ど是ハ土中より紫色色の粉と水干したる物うて血止と云る乃

最も偽物多し本条の無名異ハ地面は浮生して土にふせ

堀は三尺より五尺上中下の品りうてこれをと製液に上る物ハ

火を出る羽率毛色となり中より微青なる元舶來物と

上品といふなり僅に一分計小は至る細は砂のじ向上下品

○赤繪の物ハ錦様と云て五彩金銀と錆は施とて是ハ山の秘術

として外と林示と故に此は畧と見るとはかの硝子錆を用由と

○惣て南京焼の古器ハ其白垚得る時なりや土器

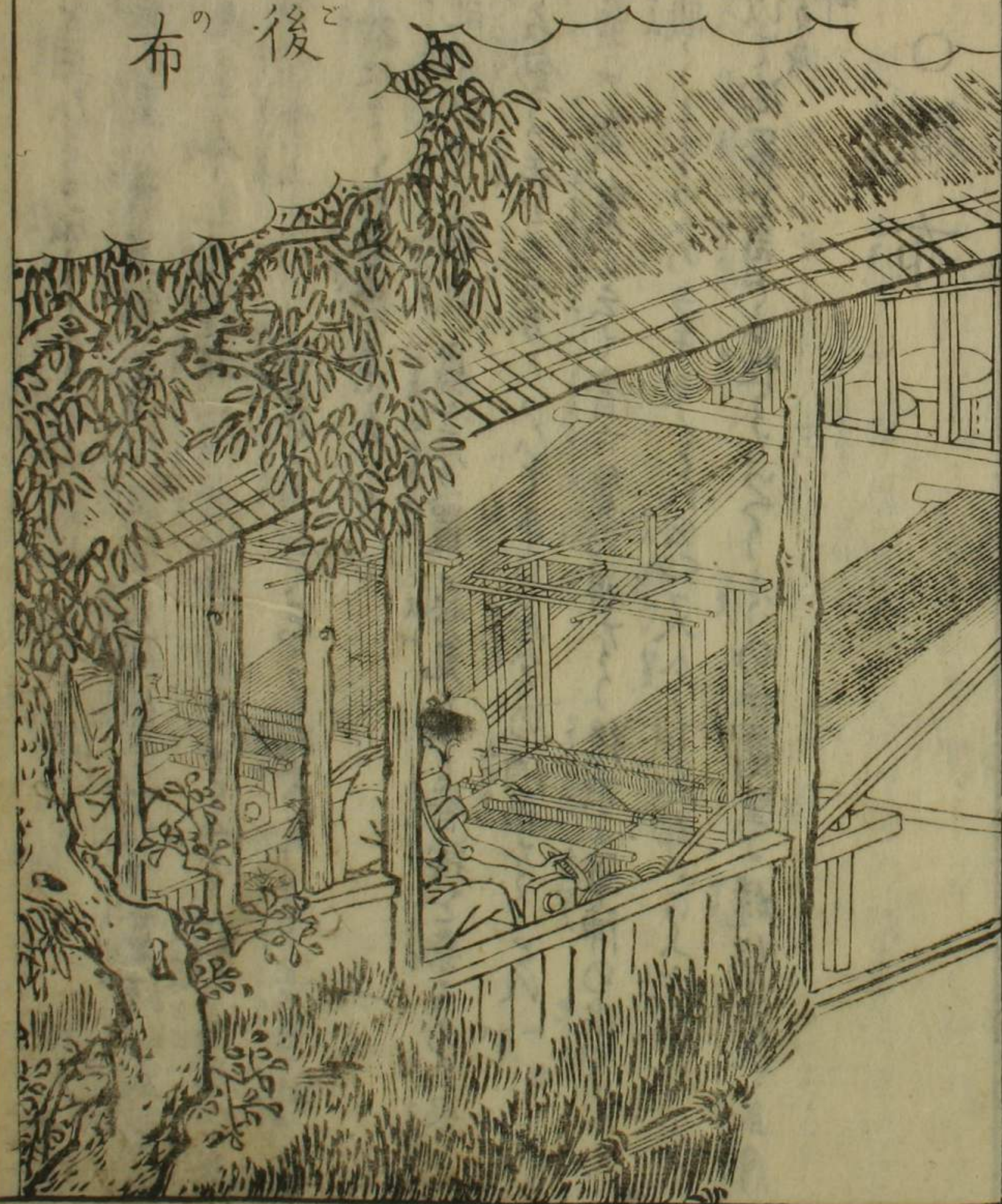
土は似く甚軟なり其上藥ハ硝子を加ふるや自ら缺損じ是

と今虫喰ふるや賞とれども用は適してハ今の物ハ方なり但

回青繪の上錆ハ錆の上より出る如見あるハ南京物の妙といふ

硝子藥の助なり日本乃青繪ハ藥の下に沈みたる如くあるハ

織越  
布の後



硝子を用ひざる故うて是又適用の爲の儀なり

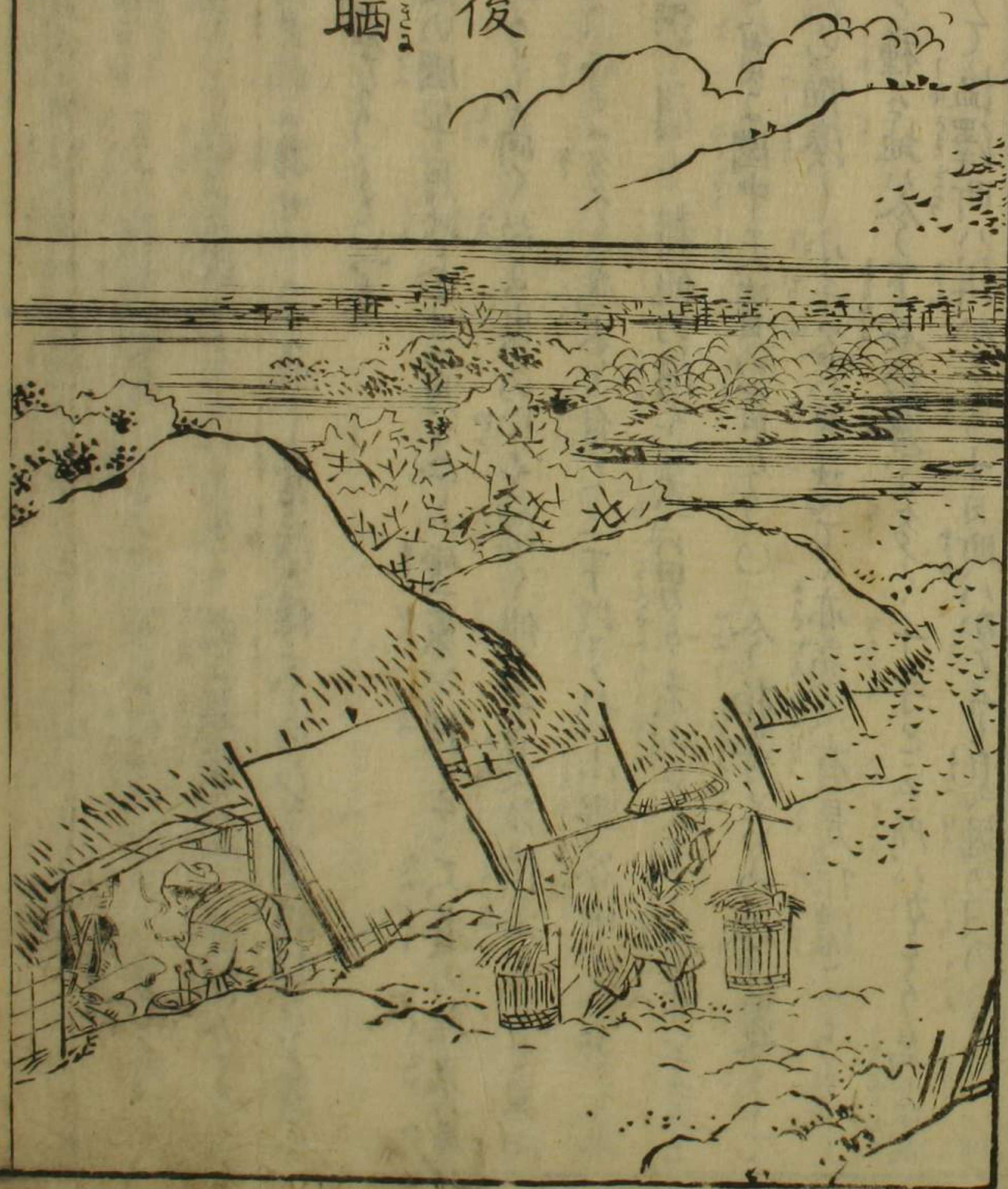
○陶器の事ハ舊事記ハ茅渚縣ハ大陶祇と云けり茅渚ハ和泉の國ハ属して今も陶器村けり古ハ物を盛るものと云く土器又本の垂と用ひ今堂上と云く土器を用ひてても塑たり是上古質朴の遺製と拾にまゝぬ風儀と見るべし

日本記神代卷ハ嚴倉 嚴倉之置 忌倉など皆神と祭るの土器又和名鈔ハ玉とヒラカといひて斗と受るの酒器なりと云一斗ハ今の延喜式ハ盆分瓦と云も皆古質の器なり後世ハ軍陣の出門のこれと説くとイツへのヲキモノといふ又今も忌部と云く古物ハ古語ハ是次以て陶器と司る性もとり今の伊萬里ハ焼ハ一昨年未詳

### ○織布

大和奈良越後近江など織出の事夥しく申すも越後と名産と越後縮と稱して草麻生質の紡績の精工なり是越後ハ織はく糸といふ未詳と云も南都近江よりハ言し其故ハ越後連接の國信濃と云く武藏下総下野常陸に皆古草麻の多く生ぜし地なれば國の名ともそれよりて号する物下総上総信濃なり上総下総ハえフサの國といひて即ちフサアサの轉語なり又麻とシナといハ東國の方言にて今も尚と云り夷蝦人の帯とシナ云本の皮とて作ると云も是なり信濃ハシナヌといふとて專織出せし地なり和名抄ハ信濃の國郡ハシナといふ名多し更科是地ハ穂科千代なる地倉科麻を納めり仁科煮て皮と剥又伊那郡のうちハ麻績更科郡ハ麻績たとの名けりて即ち麻と績なる地なり又神樂哥ハ本流能るなるのや麻と云くと云又

越後  
後  
布の  
晒  
雪



延喜式内藏寮長門の國交易よりむろ所常陸武藏下総麻  
の子是古の又大藏省春秋二季の祿布は信濃布と以内侍司に充  
るも見えく比是證とるに足る故は越後の國ハ連接なりとい  
自ら後世此に移せたるべし常陸ハ倭文といひて島模様など織出  
したる名なりといふ

○越後の國ハ十月より三月までハ雪家と埋て大道の往來ハ屋  
の棟より高く故は家の宇を深く他て是次往來とも家向  
ひへ通ハ雪は多く鷹木と付て上下はされ山野谷中とて草  
葉樹梢に隠耕他の便を失ふ男女老少となく織布と業を  
とるて實は國中天資の富なり○今柏寄といふは海邊にて  
布商人の幅漆ハ小千谷ハ畠隅て亦商人有是信濃よりうり  
苧麻と種る地ハ今下谷の邊は多く千手と云所ハかき島上織  
の場とて塩澤町ハ緋かき十日町ハかき島堀の内の邊ハ白縮

と専て一材ハ一品の島模様との織て他品と混ぜば問屋  
是と取合せて諸國ハ貨賣と

○苧麻種植ハ漂染織の事

苧麻ハ土にて生ぜり

なり撒子分頭の両法より色も青黄の両様より毎歲兩度刈  
物より然もども土よりて同種のりめ其性の強弱有既は近江  
は種る物其性柔滑なり東國寒地の物ハ至て強故は越後其性  
の柔もいづらに都は遠くて人性も質素なれば工巧最精

○大麻ハ楓葉の如く苧麻ハ桐の葉は似大は異なり苧麻ハ生  
て皮を剥ぎ大麻ハ煮ゴキとて煮て剥なり大麻ハ雄ハ花よりサ  
クラアサと云雌ハ花なく實より是種りて時ハ自ら交りて生じ  
即雌雄なり苧麻ハカラムシと云ひて苗高五尺許五月八日は刈其  
跡を焚きておけば来年肥大なりとて是奈良をといひく南都  
は織物是なり越後最苧麻なり種類山野は多し○凡苧の皮

剥取して後若雨はいつた腐爛する故に晴天と見定むるよりつゞ  
をハ折らざるも草と破折の時水と以て侵し是亦其刻詩より  
久しくいひききと色ハ淡黄なるを漂工屋是と晒して白色に  
るより先稻灰と石灰とを以てふと加へ煮て又流もふ入ててつゞび  
晒らるる

○糸は紡るより上手の者ハ肺車と用ひ是女一人の力ハ三倍其  
うち性より物と撰て細く破きて織るなり粗き糾合せて繩  
或ハ縫線の糸とに

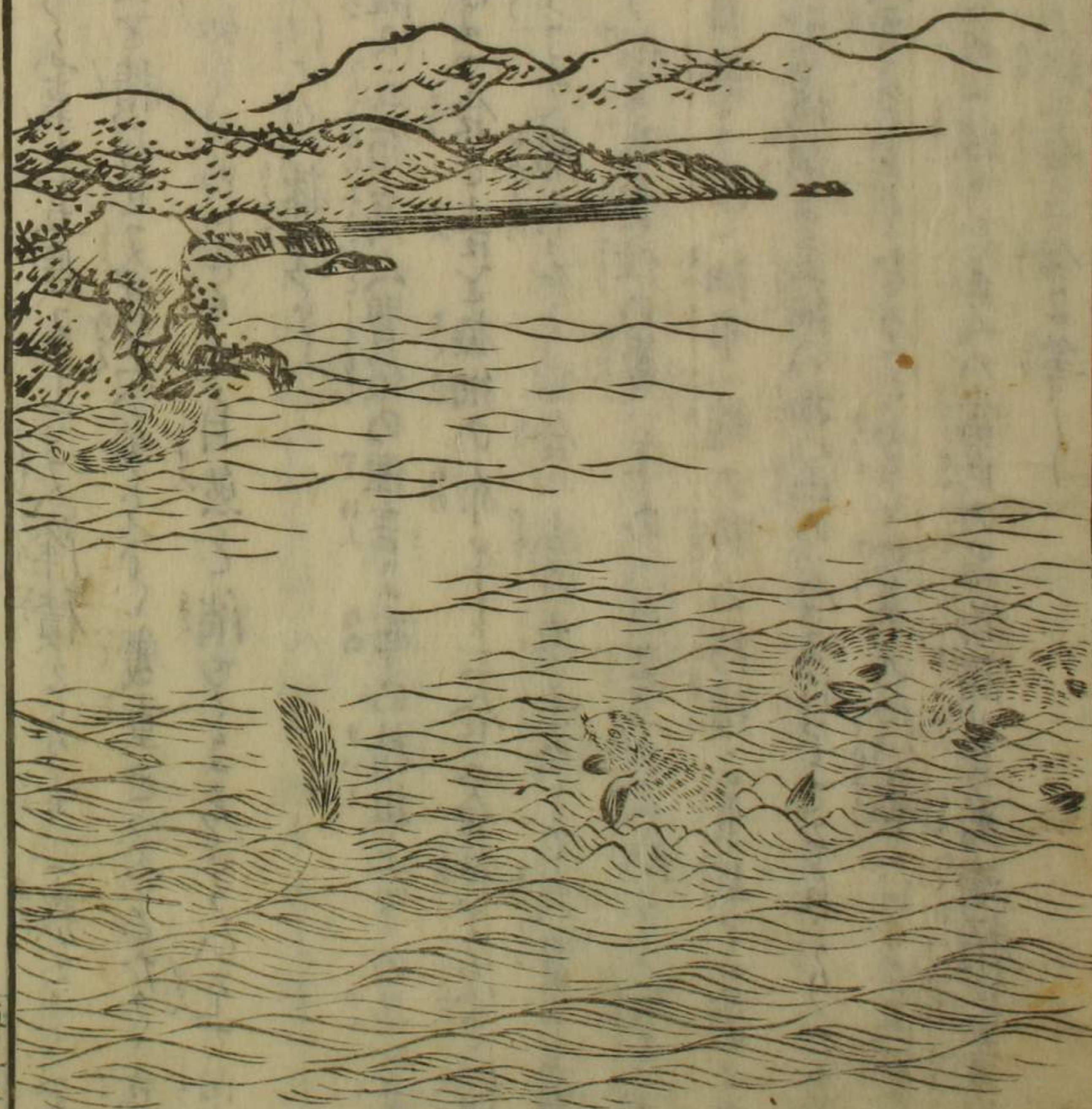
是皆婦人の手力專うて男相交る故に國俗と産するものと喜  
づるんが中ハ二歳三歳の時指の爪を候ハ細手粗手の生質を候ハ  
若細手の生れ付なれハ國中にうらうて是ととむ

○糸は染る事京都の志とにからるる島類ハ織上と宿水  
は揉洗る陰乾る白布ハ織て後ハ晒らる是は晒るハ彼灰汁

つて揉洗る事三五度つて又降積る雪ハ敷なりつて  
其上ハ亦雪と積らせ又其上へなると幾重とつて高  
堤と筑る如く日のつらて自然と消ゆくまゝに至て白く  
なるを又揉洗る

○一説ハ云布商人習俗の俚言ハ布の精粗上下の品を見  
るは一合と三合と極細の布と二合三合是より次ぎに但  
是山中つて織布たり一合ハ山の頂上より人質も其素  
朴なり故に衣食住の費一年の入用妻子に給る取つて  
五六十目許つて細布一端の料の紡績は事足る甚とみ  
せはから故に至細の物ハ山の合よりつてそれより二合三  
合と次ぎよりなるを今ハ世事の急より見  
るよりこれに依てわたりハ當世の器物諸藝ハ萬端精良昔に  
分るつと二合三合は等

蝦夷人  
捕鰓肭



○ 膾 膾 獸

是松前の産物といふも蝦夷地ヲシヤとて取て採るなり  
寒中三十日より二月乃至ふれども春の物ハ塩の利ヲとて  
貢献必寒中の物といふも蝦夷地ハ運上屋といひて松前より  
七八十里東北より最丹路其遠と七八百里といふも運  
上屋ハ松前奥島近江など其外商人の出店よりて先松前より有  
司下其交易と校監と日本より渡す物ハ米塩麵古手たぐこ器  
物等といふ物ハなり又蝦夷の産ハ海狗 膾 膾 熊 同膾 鹿  
の皮 鱈 鮭 昆布 鮑 鱒 二子 數の子 等なり  
其内蝦夷錦ハ満島 韃靼 蝦夷地のソウヤと云ふ  
持渡る又熊ハ先子と取りて其翌日親と捕まり子ハ婦人  
の乳ヲ養ひ齒の生ふるに至ると雜物を食せしる成長の後材

本よりて取めたるはしるは成るるに薦のせ酒肉と見へるなりて後  
膾と取て肉と食ふ

○ 膾 膾 獸とヲツトセイといふハ誤なり獸の名ハヲツツなり  
或書ニ膾膾膾とかいふハ外腎の事にして罌丸なり藥用是と要  
として肉の論ハしるは故ハ陰莖といひて仁貞責とる物ハ外腎の  
間違なり津輕南部より出て真偽甚紛ハる是種類有る故  
なり海狗一名といふは是れも是種類の物名なり其余海狗  
と云有是誤和語ニアサフと云皮ハ黒珪点有て膾膾に似たり  
其鹿の同種なり○ 海狗ハ海のカヲツとて是全く形狀膾膾  
に相似たり是と別ハ前前の齒二重を生ふる物真の膾膾と云又  
一説ハ二重齒ハ一齒許なりといふ又頭上ハ塩とよく一穴有  
毛ハかくきく見えがごとく肉とても百ヒロクとも寒水の内ハ投して  
其水温煖よりて氷より物真の膾膾と知るなり

同運  
上屋



○陰莖とつゞくも偽物有て百口を以て造るとり故に毛を  
号て百口はタケリと云真なる物ハ三寸許赤色より本は毛より全  
身灰黒水獺にれなくもて微く長く顔ハ猫に似て小く口の吻  
鬚甚大なり。思の次は左右は足有大鰭の如く後の足は尾前より  
てもとより長さ二尺許其尖は五つの爪なり尾ハ細く海底最も深所  
棲又ハ海邊石上ハ鼯睡と或ハ群となりて寐たり流る其内一足睡  
むして候ひ若船来むに忽ち聲を付けて睡とさませ水中ハ隱  
水と行く時ハ半身と水上ハ出して能く遊を波を切ると最盛なり  
海獺もとどく右よりつゞく今膾膾といひて来る物多くは海獺  
て其真ハ得がごとく南部一粒金丹も是と云る人を才といふなり  
本草集解ハ東海水中に出ると記せしハ是中華も稀なりて昂  
日本より渡るとい見えなり。○蝦夷ハ大を子ツツ中級ナヨキ  
小とウ子ウと云是真の膾膾なり鰭とテツヒと云一足と一羽と

云津輕とてはテツヒと採アとサカナと云其中心は太なりとトハ  
つ今女児の言ハ魚依とてト、と云ハ若や是より言来ぬも  
ちとどく中中華といふ言なり  
又夫木集雜十八夢の題ハ建長八年百首歌合夜笠内大臣  
我意ハ海驢の寢なぐれと云やらぬ夢なるなり及やと云ん  
と泳ぐと云ハ海馬の種類にて別なり又海驢乃文字を日本記神代  
卷龍宮の章より千の皮といふ訓也  
○捕獺 蝦夷人足と捕ふ縄とてからとる舟は乗りてかの  
寢なぐれの群を見まわ狐の尾を以てうりてかの起番の二羽は見え  
まばたき恐れて聲を立てて去るを待ちて寝たり取ると或ハヤス  
たどくそ採ると其手練他の乃と取るとは舟にとどく掉とて事  
うへ前後へ漕ぐなり

○或云膾膾といふ膾をばし多に外賢と云る如何或書に彼獺

を得と欲して松前南部の人を見むとも免角して得がこと  
此土人の調と聞けハ臍と陰莖と甚く通一故陰莖と取る時  
必臍と損じて全くなや或人云是雄なり其雌ハ必臍にらん

### ○昆布

和名 ヒロメ 一名 海布

是ハ六月土用中より常ニ採ることを同く蝦夷松前に刺箱館  
などとも採る小舟は兼り鎌を持ち水中に暫く佇て昆布を  
抱是より浮いて浮び皆海底の石に生ひて長さ三四尺より十間許れ  
のけしきよくに石ともよくはれども十日許りて根自ら  
離る長さ一丈程に切れて蝦夷松前の海濱の砂上家の上往来の  
道に至るまで一日乾くと實は錐と立ふの際なる暮は納めて  
小家に積み其上に庭を覆ふと一夜して汐はききと荒昆布  
と俗に蝦夷の家は昆布をとりて甚く乾くと云は乾くと  
色赤きと上品と

て僅う其階級をこりてり又ハ九月の比自然おろぐと奇せ昆布  
と云 ○昔ハ越前敦賀は傳送して若品は傳小濱の市人  
と制して若狭昆布と號と若狭より京師は傳送して京師亦是  
次制して京昆布と号は味最とも勝る

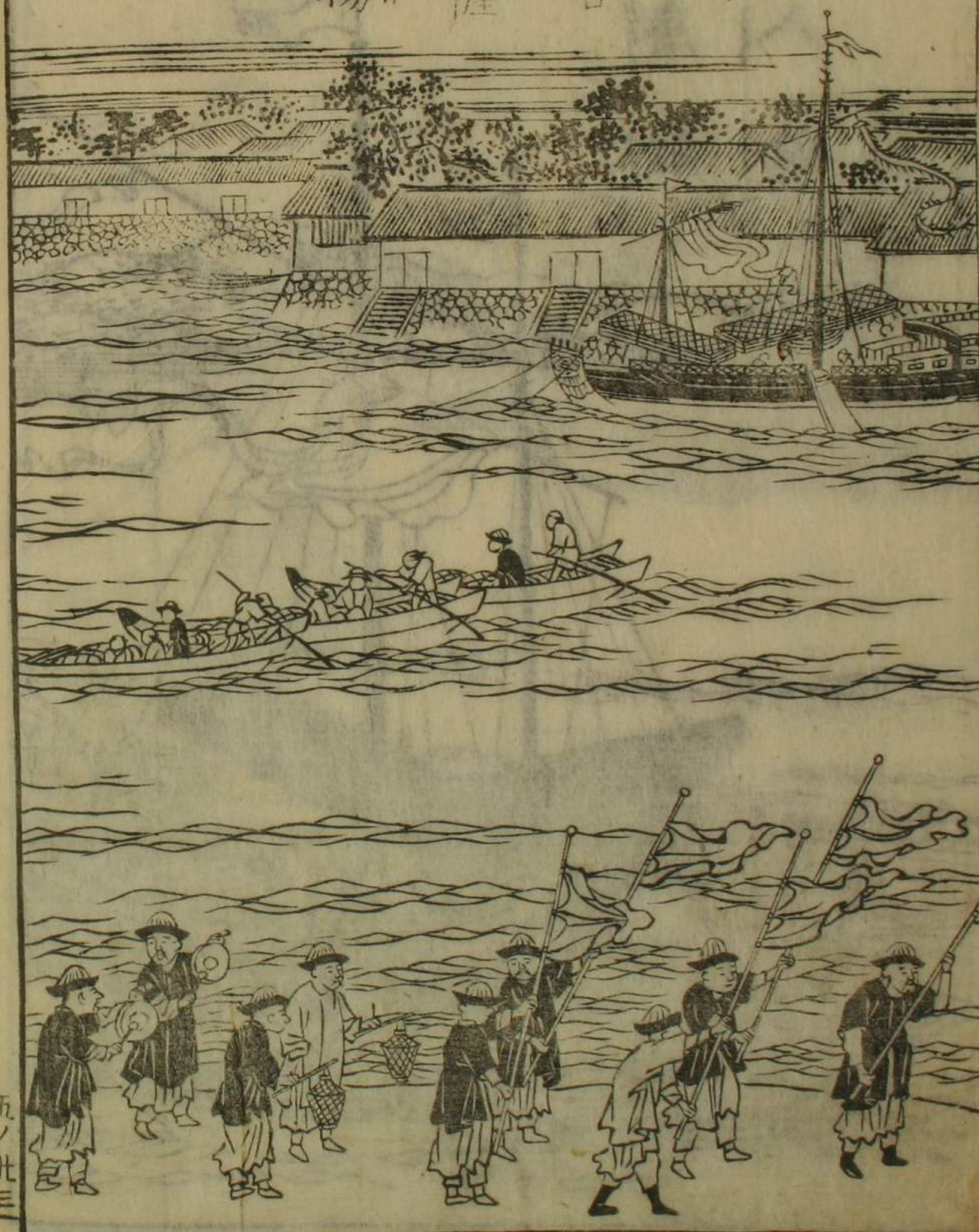
○右ハ皆俳諧行脚の人松前往來の話は傳へて實は  
見及びていふは尚其蝦夷人の衣服などのいふ  
は先づ一ハ日本の古手と貴い富るもの一郷の社妻  
など酒樽と積むる上かの日本の古手といくらもか  
さめて装飾と入りの地を織物ハライヒヤウと云木の皮と  
色黄くして紋有方言アツと云て甚臭き物なりえり  
紐ハ左は合せミナノ皮と帯と男女とも常は浴湯せし眉々  
両眼の上は一文字は生ひ髪ハ勿論鬚髪とも切るこみけ  
きき其長し食と付ハ箸次左のひも持ちて髪を上げて

入唐  
津船





同 菩 薩 揚



吸<sup>そく</sup>てめむ酒<sup>さけ</sup>ハ行<sup>やう</sup>器<sup>き</sup>の如<sup>ごと</sup>き物<sup>もの</sup>入<sup>い</sup>るく杯<sup>さう</sup>ハ飯<sup>めし</sup>椀<sup>わん</sup>と用<sup>もち</sup>由<sup>よし</sup>其<sup>その</sup>椀<sup>わん</sup>皆<sup>みな</sup>巴<sup>え</sup>の紋<sup>もん</sup>と付<sup>つ</sup>く其<sup>その</sup>故<sup>ゆへ</sup>と知<sup>し</sup>るは女<sup>に</sup>人の皆<sup>みな</sup>唇<sup>くちびる</sup>入<sup>い</sup>る墨<sup>すみ</sup>て男<sup>おとこ</sup>女<sup>をんな</sup>とも涙<sup>なみだ</sup>ハ鼻<sup>はな</sup>より流<sup>なが</sup>るなり山<sup>さん</sup>野<sup>や</sup>は出<sup>い</sup>るもの皆<sup>みな</sup>雪<sup>ゆき</sup>中<sup>なかつ</sup>とてども蹤<sup>あと</sup>跡<sup>あと</sup>して腰<sup>こし</sup>をめしと持<sup>もち</sup>せり最<sup>しち</sup>木<sup>もく</sup>弓<sup>きう</sup>本<sup>ほん</sup>矢<sup>や</sup>と用<sup>もち</sup>由<sup>よし</sup>又<sup>また</sup>ブスといひて熊<sup>くま</sup>鹿<sup>ろく</sup>と採<sup>と</sup>る矢<sup>や</sup>は塗<sup>ぬ</sup>る所<sup>ところ</sup>乃<sup>すなは</sup>毒<sup>どく</sup>藥<sup>やく</sup>ハイケて云<sup>い</sup>草<sup>くさ</sup>の根<sup>ね</sup>と蜂<sup>はち</sup>とこゝろへて制<sup>せい</sup>衣<sup>い</sup>せし物<sup>もの</sup>なりとぞ但<sup>ただ</sup>一<sup>ひと</sup>脰<sup>うし</sup>臍<sup>せい</sup>へは毒<sup>どく</sup>と用<sup>もち</sup>ど

為<sup>た</sup>家<sup>け</sup>卿<sup>けい</sup>の哥<sup>うた</sup>は

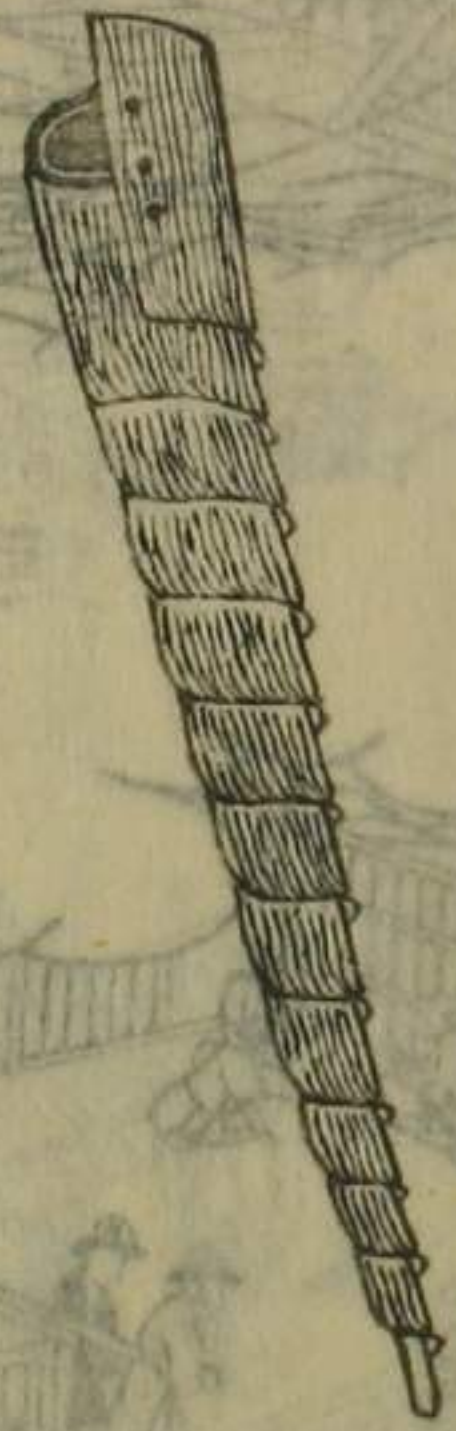
又<sup>また</sup>招<sup>しょう</sup>巴<sup>え</sup>の發<sup>はつ</sup>句<sup>く</sup>は

春<sup>はる</sup>の夜<sup>よ</sup>やるぞうこそふくそその月<sup>つき</sup>

とてふはこそいふ人の未<sup>いま</sup>にても明<sup>あ</sup>る知<sup>し</sup>物<sup>もの</sup>なりとてふは或<sup>ある</sup>人の傳<sup>でん</sup>寫<sup>しや</sup>に來<sup>き</sup>るもの序<sup>しよ</sup>を以<sup>もつ</sup>てこそは圖<sup>ず</sup>と

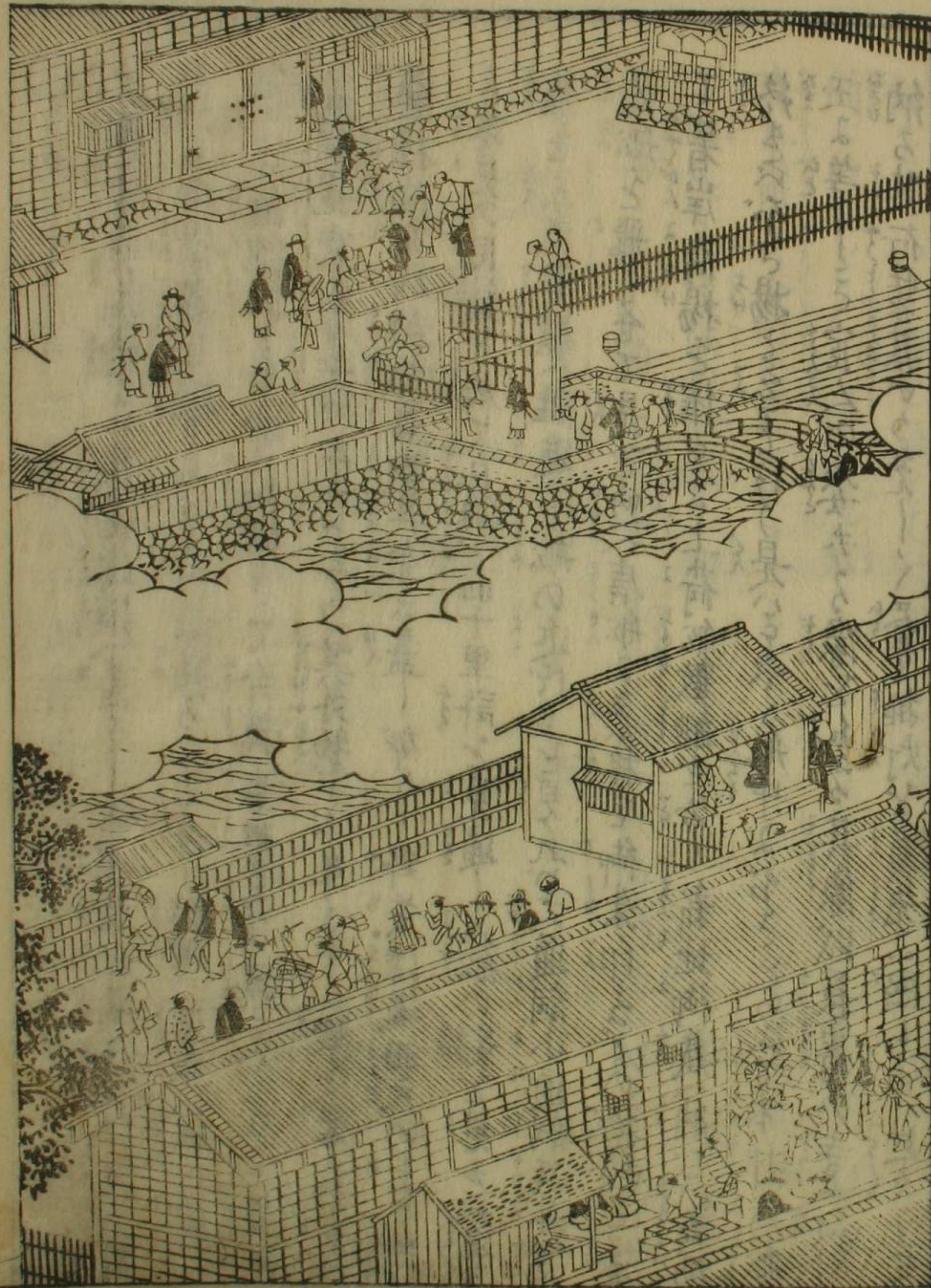
十二<sup>じふに</sup>塔<sup>たつ</sup>

木の皮<sup>かわ</sup>を巻<sup>ま</sup>き白<sup>しろ</sup>く色<sup>いろ</sup>を帯<sup>おび</sup>たる藤<sup>ふじ</sup>の蔓<sup>つた</sup>のてきと本のうらうら物<sup>もの</sup>長<sup>なが</sup>二<sup>ふた</sup>尺<sup>しゃく</sup>すそりなり



按<sup>お</sup>じりは是<sup>こゝ</sup>はコサるはりて彼<sup>あ</sup>の笛<sup>ふえ</sup>なりとてやほはゆきを合<sup>あ</sup>ひて空<sup>そら</sup>向<sup>むか</sup>てふとらけ其<sup>その</sup>邊<sup>へん</sup>の月<sup>つき</sup>教<sup>しやう</sup>と墨<sup>すみ</sup>を合<sup>あ</sup>ひて渾<sup>こん</sup>捕<sup>と</sup>けり又<sup>また</sup>一<sup>ひと</sup>説<sup>せつ</sup>は山<sup>さん</sup>中<sup>ちゆう</sup>海<sup>かい</sup>邊<sup>へん</sup>なりと出<sup>い</sup>るもの落<sup>お</sup>ちる本の葉<sup>は</sup>と拾<sup>ひろ</sup>ひてとて巻<sup>ま</sup>いて是<sup>こゝ</sup>は吹<sup>ふ</sup>くに實<sup>じつ</sup>は笛<sup>ふえ</sup>の音<sup>おと</sup>吹<sup>ふ</sup>き出<sup>い</sup>て秋<sup>あき</sup>情<sup>じやう</sup>と催<sup>もよほ</sup>はるを并<sup>なら</sup>べとて云<sup>い</sup>俗<sup>ぞく</sup>傳<sup>でん</sup>は義<sup>ぎ</sup>經<sup>けい</sup>蝦<sup>え</sup>夷<sup>い</sup>とてそののて虚<sup>こ</sup>實<sup>じつ</sup>さるなりとて云<sup>い</sup>是<sup>こゝ</sup>は正<sup>せい</sup>説<sup>せつ</sup>なり海<sup>かい</sup>濱<sup>ひん</sup>は辨<sup>はん</sup>慶<sup>けい</sup>寄<sup>き</sup>れ名<sup>な</sup>とて又<sup>また</sup>清<sup>せい</sup>朝<sup>てう</sup>ハ清<sup>せい</sup>和<sup>わ</sup>の衣<sup>え</sup>箱<sup>はこ</sup>と云<sup>い</sup>し即<sup>すなは</sup>義<sup>ぎ</sup>經<sup>けい</sup>蝦<sup>え</sup>夷<sup>い</sup>より傳<sup>でん</sup>越<sup>えつ</sup>てとては證<sup>しやう</sup>とてとて多<sup>おほ</sup>きと云<sup>い</sup>しゆりり蝦<sup>え</sup>夷<sup>い</sup>より韃<sup>た</sup>靼<sup>た</sup>の近<sup>ちか</sup>なり

# ○異國產物



長寄唐人屋敷  
新地

御蔵

○大関秀吉公の時、い泉品堀浦（着る）と其後肥前平戸に移、元龜の比より長寄、改よりて今、後ること、け地、元来山中なり、と玉の浦深江とく、切開きて今、萬家繁栄の湊といふ、唐船ハ南京、北京、ホクチウ、チヤクチウ、其外惣く一年、十三艘を来、其、薬種、絹布、砂糖、紙、器物、其余、云々、盡く、が、野茂、深堀、西戸の上、所、遠見の目鏡と居て、凡海上四十里許と見通く、入船の影と見え、追々、幡を立て、官聽（註進）船の近づく、と見れば、大通詞、小通詞、其外、官人、船を飛、せて、是と迎へ、唐船、乗移て、御朱印、などの、檢校と、遂て、着岸、荷揚を催、上、荷船、數艘と出、新地、御藏（納む）荷揚、終、む、や、揚と、是、い、船中、む、て、本邦、乃、船、玉、等、官人の姿、たる、像と、其、像、以、長寄の寺（取）け、納、其、行、装、甚、い、り、登、挑、灯と、真、先、照、ら、け、て、

鉦をら、捧と振、て、踊躍、を、所、は、る、ど、く、唐人、屋敷、へ、入、て、無、事、着、の、加、賀、宴、と、設、け、時、丸、山、町、奇、合、町、の、遊、女、に、ま、り、客、と、定、ん、て、食、餐、を、以、後、出、船、は、臨、ん、て、御、定、法、の、御、渡、物、剪、海、軍、昆、布、手、艶、紙、傘、ぬ、物、ふ、の、簪、扶、苓、其、外、小、間、物、數、品、或、ハ、時、の、好、む、物、を、配、分、ら、ふ、又、唐、物、ハ、官、聽、御、拂、物、と、り、上、格、の、商、人、に、入、れ、て、是、と、配、分、

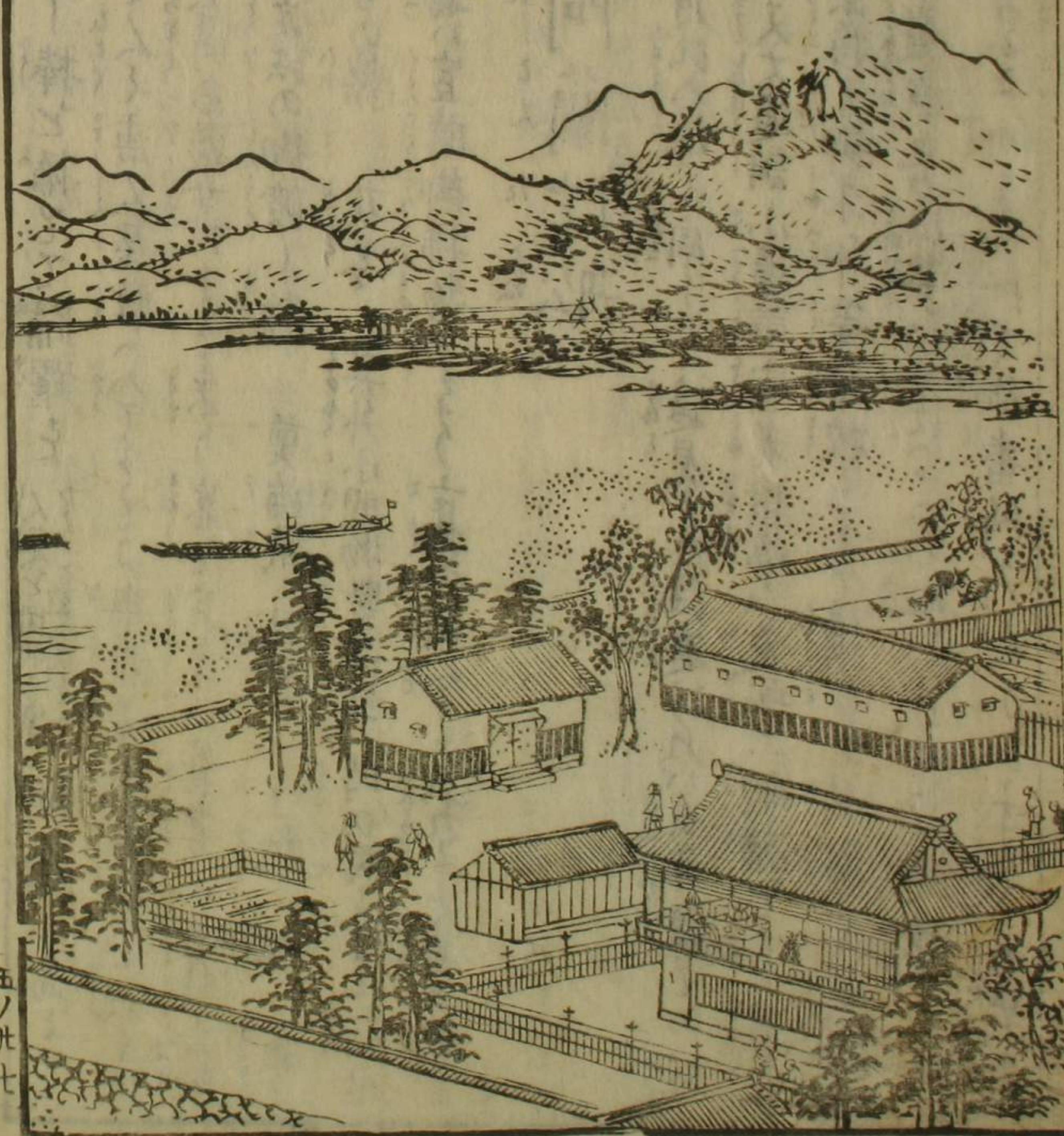
○阿蘭陀船

是、毎、年、七、月、以、八、津、を、同、く、遠、見、より、注、進、に、れ、バ、去、年、渡、り、の、紅、毛、カ、ビ、タ、シ、又、大、通、詞、小、通、詞、官、者、附、添、に、飛、船、二、艘、幡、と、立、て、漕、出、し、元、船、へ、乗、移、し、御、朱、印、等、檢、校、を、と、て、漕、戻、る、其、跡、を、そ、の、船、ハ、石、火、失、と、發、事、九、つ、は、勢、ひ、に、引、船、し、ま、り、て、次、才、は、紅、毛、を、西、戸、な、る、ふ、戸、町、と、所、御、番、所、乃、む、か、い、り、て、石、火、失、

津 船 紅  
入 毛



敷 毛 島 同  
家 紅 出



紅毛船  
船公



と發事七つ宛生島の湊へ入て又九つと寄かくは時船は播とされ  
ハ生島屋敷の同じく堅る是と播合とてこゝに於て音楽有て  
其音妙なりこれより碇をおり又石火矢を發と事十八にて  
は時黒烟空中に満ちて暫時船と見る事なり船中ハ其烟の  
間ハ四十八の帆と悉く卷上十所は旗と立てとてく裝飾し烟の  
次才は消るる所れ更と造るるごとく其花美眼と奪集し許甚と  
見事なりかくてえ船のカビタシ小舟は棄てて生島よりこれ  
紅毛屋敷前年のカビタシ従者其外遊女などほとこし是と  
追ひ入もて立安と催となり荷一同く藥種小間物類他國の珍  
器ども是と揚るる九十四日許なり本邦より渡り物ハ先銅等紙  
類其外器物等と賜て毎年九月十九日と前年のカビタシの發船  
と相定る當年のカビタシと殆ど正月十五日ハ貢獻の物と持て  
江戸に趣と四五月の比長寄より又新船入津と相待てり

跋

こよ補世ありかふおもんはく力ある本の  
下ををみまの川波のすくあまんかきなりぬ  
関なりいぬ一しぬぬるもあつ國のさかりか  
ろこのめすもいぬぬるも一しぬぬるもいぬ  
いぬぬるものすかきぬるもいぬぬるもいぬ  
はぬあつぬぬるもいぬぬるもいぬぬるもいぬ  
かくてもいぬ子藍江のなぬぬるもいぬぬるもいぬ  
神乃おろしほるぬるもいぬぬるもいぬぬるもいぬ  
かきぬるものすかきぬるもいぬぬるもいぬぬるもいぬ  
いぬのえのぬるもいぬぬるもいぬぬるもいぬぬるもいぬ



畫圖

法橋關月



山海名産圖會

續編

近刻

寛政十一己未年正月

高木遷喬堂梓

浪花書肆

鹽屋長兵衛

心齋橋筋北久太郎町

浪花風船上人輯

新撰往生傳

全八冊 合五冊

鎌倉光明寺ノ良曉上人ヲ始トシ近世ニ及ビ紹  
祿庵入ト部ヲ分チ專ラ高德ノキユヘ有テ採集  
ス緇素信ジテ熟讀翫味スベキ旨ナリ

同上人輯

新撰九品往生傳繪詞

全四冊 惠心修都を主とめ九品生  
一の往生の傳を記し絵と詞とあり  
冊婦女子もよく安くせしむるなり

洛北湛證上人輯

一言芳談鈔

全二冊 白と黒の二冊あり  
未代偶世の俗生の癖を記しるべき先哲の言を  
ゆゑに集めしむるなり 俗語もよく漢語もよく  
もまじりかたうきものあり

高野山細見繪圖

全二折 金剛峯寺一山壇上法伽藍より  
寺院のありさまをくわしくあらわす

文政十三寅年購版

心齋橋南久太郎町

浪花書林

塩屋長兵衛

堀木町渡辺筋西へ入

播磨屋幸兵衛

